

夏期学校を担当した甲信地区指導者の一人として、先輩指導者たちのレッスンをつぶさに観察。生徒たちをどう育てるか、常に研究する日々を送る宮下朱里先生の長野市の教室を訪ねた。真夏の一日、大きなはつきりした声が響き渡り、生徒たちのキラキラした瞳が輝いていた。

楽しみに通える教室づくりの目指し

ヴァイオリン科 宮下朱里先生クラス



宮下朱里先生クラス

長野県



大活躍のミニホワイトボード。生徒がくずった時には、「一つできたら五線を越えちゃおうね」とマグネットを移動。見せる工夫が秀逸

★ 41 教室めぐり 長野

・長野市鶴賀七瀬南部 350 (南部小学校北)
tel.090-2170-3416

いつも明るくて元気な宮下朱里先生のヴァイオリンとの出会いは、3歳の時。遠縁にあたる宮下理恵先生(甲信地区ヴァイオリン科指導者)の教室で先に習っていた再従兄弟の発表会の勇姿を見て、「朱里です。ヴァイオリンをやりたいです」と理恵先生に電話して、周囲を驚かせた。以後、一貫してヴァイオリンが大好きで練習も嫌にならなかつた。「目標があるのがんばれるタイプであることを母が一番よく知っていました。曲の難しいところになると、部分練習をさせるのが、すごく上手で...」。その方法は、絵を描くこと。1回弾くと、動物の輪郭を、2回目は目を、3回目は耳の中を、と5回くらいで絵が完成するというもの。嫌がらず練

習でき、指導者になった今、生徒の母親へのアドバイスに生きているという。
6歳で、鈴木鎮一先生のレッスンを受けた時のこと。感情たっぷり「ロング・ロング・アゴー」を弾いた朱里さんの左足の下に、鈴木先生は小さな亀の置物を置いた。「身体を大きく揺すりながら弾く私を見て、置物を足の下に置くことで、正しい姿勢を伝えよう」とされました。効果テキメンだった。
その頃、日華スズキチルドレン親善コンサートで台湾を2回訪問。上級生が演奏したエックレスのソナタの最初の2音で大きな拍手が起る歓迎ぶりが印象に残っている。13歳の時には、日中友好協会の少年少女ヴァイオリン訪中団の

一員に選ばれ、北京で演奏した。高校を卒業するまで理恵先生のもとに毎週通い、明治学院大学文学部芸術学科に進学しても、長野市に帰郷するたびに、レッスンを受けた。その指導は、生徒一人ひとりにあわせて、やる気を引きだした。「その子にあった火のつけ方が本当に上手でした」。小学校の卒業文集に「ヴァイオリンの先生になりたい」と書いたのも、理恵先生への憧れからだった。
大学4年の時、管弦楽団のコンサートマスターを務め、後輩の初心者教える楽しさに目覚めたことも、指導者になってみたい気持ちを加速させた。すぐに、国際スズキ・メソッド音楽院の入試の課題曲、メンデルスゾーン協奏曲



宮下理恵先生(サンタの後ろ) クラスと合同でクリスマス会を開催。合同イベントや支部発表会は上級生もいて、とても嬉しいひと時



音楽院の卒業演奏会で両親と。好きな道を歩ませてくれたことに、感謝された鈴木先生と、才能教育会館のレッスン室で記念撮影

を理恵先生のもので勉強し直した。音楽院では、豊田耕児先生から「自分の出した音に責任を持ち、音程の芯まで向かい合う」、館ゆかり先生からは「常に考えて弾く」姿勢を徹底的に学んだ。ヴィオラとの出会いも大きなエポック。ヴィオラの発音や運弓がヴァイオリンにもいい影響をもたらした。
震災の年の10月に卒業。1年の準備期間を経て、2012年10月、祖父の土地で教室をスタート。生徒も順調に増え、教室は明るい雰囲気になった。先生、生徒が逢いたくなる先生、行きたくなる教室であること」を目標に、室内に季節感を出す細やかさも忘れられない。

一方で聴音や読譜へのこだわりも。楽譜への親近感を持たせるための、五線の書かれたミニホワイトボードが大活躍していた。6つの赤色マグネットが、生徒の関心を誘う姿はとてもユニーク。用意された教材ではなく、生徒の反応を見ながら指導できること、生徒自身も自在にマグネットの音符を動かせるところがいい。「だんだんと楽譜への抵抗感がなくなり、身近な存在になつてきたようです」
中学の同級生と組んだデュオ「ヴォルナ」では、幼児向けのコンサートなど活動も多彩。長野市を拠点に、演奏家としての横顔も充実してきている。



クラシックなど110曲のレパートリーを持つ「ヴォルナ」。キッズファミリーに大人気だ



レッスン冒頭で指合わせ→キツネさん→鉛筆を持ち→弓を持つ。流れが鮮やかでスムーズ



年長児のゴセック。楽譜にたくさんの色が塗られていて、親近感を持つ様子がよくわかる



先に習い始めた母親が「キラキラ星」を演奏する間、子どもはヴァイオリンを保持する



動物の絵を30分割した「おけいこカレンダー」。練習したら塗りつぶし、意欲づくりに◎